

歴史の陰に埋もれた幕臣と、幕末最大の建設プロジェクト

12月15日発売 『小栗忠順と横須賀製鉄所』

日本の「ものづくり」の原点を解き明かす

株式会社有隣堂（本社：神奈川県横浜市 代表取締役 社長執行役員：松信 健太郎）は、2026年12月15日（火）に新刊『小栗忠順と横須賀製鉄所——幕末から明治へ「近代日本の礎」』を刊行いたします。

著者は、横須賀市自然・人文博物館 主査・学芸員で近代建築史・産業遺産を専門とする菊地勝広氏。本書は、幕末に非業の死を遂げた幕臣・小栗忠順の足跡と、彼が心血を注いだ「横須賀製鉄所」の全貌を科学技術史の視点から捉え直す一冊です。造船にとどまらず、機械製造や西洋式建築、技術者の育成から労働制度に至るまで、日本の近代化・工業化の基盤がいかにして築かれたのか。技術支援を受けたフランス側の貴重な記録や紀行文・手紙も読み解きながら、小栗忠順の歴史の陰に埋もれてきた先駆的業績と、横須賀製鉄所が果たした役割を明らかにします。

■本書の背景

黒船来航から明治維新へと至る激動の時代のなか、日本は開国を経て近代化への道を踏み出しました。その過程で重要な役割を果たした人物の一人が幕臣・小栗忠順（おぐりただまさ）です。幕府の中枢で外交交渉や近代技術の導入を牽引した人物でありながら、大政奉還後に知行地へ退くと、戊辰戦争の混乱のなか、取り調べを受けることなく新政府軍によって処刑され、その非業の死とともに功績は長らく歴史の陰に埋もれてきました。

その小栗が後世に残した最大の功績こそが、幕末最大の建設プロジェクト「横須賀製鉄所」の創設です。横須賀製鉄所は、造船・修理だけでなく、機械製造や西洋式建築、技術者の育成など幅広い機能を備えた施設でした。また、日曜休日制などの労働時間の管理など、当時としては先駆的な制度も導入され、日本の近代化・工業化を支える礎となりました。

本書は、小栗の足跡をたどりながら、日本の「ものづくり」の原点となった横須賀製鉄所が近代技術発展に果たした役割を解き明かします。フランスの貴重な一次史料を交え、歴史の陰に埋もれてきたその功績を科学技術史の視点から描き出す一冊です。

●書名：『小栗忠順と横須賀製鉄所——幕末から明治へ「近代日本の礎」』

●著者：菊地勝広

●出版社：有隣堂

●定価：1,210円（税込）

●体裁：新書並製・本文192ページ

●ISBN：978-4-89660-268-5

●発売日：2026年12月15日（火）

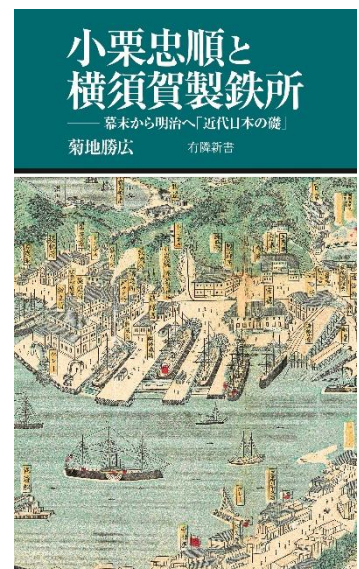
●取り扱い：有隣堂各店（一部店舗除く）、全国の書店

【目次】

第1章 小栗上野介忠順 人と業績

第2章 最大の功績・横須賀製鉄所

第3章 日本の近代化・工業化に果たした役割



第4章 明治日本の技術力を支えた「小栗忠順と横須賀製鉄所」

■本書の特徴

1. 造船・建築から労働制度まで——日本の「ものづくり」の原点を解き明かす

横須賀製鉄所は、造船施設にとどまらず、機械製造や建築、技術者の育成など、日本近代産業の基盤を築いた一大拠点でした。本書では、当時技術指導を行っていたフランス人技師の紀行文や、貴重な史料を駆使し、往時の工場の熱気を臨場感豊かに再現しています。日本最古級のスチームハンマーの導入や日本初の洋式灯台建設など、現代に息づく日本の「ものづくり」の原点を現場の実感が伴うリアルな姿として解き明かします。

2. 「悲劇の幕臣」小栗忠順の全体像と領民に愛された真の人物像

小栗忠順は、若くして遣米使節目付に抜擢され、ロシアとの領土交渉、軍制改革、四度にわたる勘定奉行就任など、幕府の最重要政策に携わった人物です。本書は、製鉄所への貢献のみに偏ることなく小栗の先駆的業績の全体像を提示するとともに、終焉の地となった知行地・榑田村（現・群馬県高崎市倉淵町榑田）の人々をなぜ深く愛し、また村人たちから命がけで愛され続けたのかという温かな人間性にも光を当てます。横須賀製鉄所創設によって偉大になったのではなく、偉大な人物である小栗忠順が携わったからこそ成し得たという、小栗の真の姿を浮き彫りにします。

■著者紹介

菊地勝広（きくち・かつひろ）

1972年、宮城県生まれ。横須賀市自然・人文博物館主査・学芸員。博士（工学）。専門は建築史学・近代建築史。横須賀製鉄所・造船所を中心に、近代日本の建築・土木技術や産業遺産を研究。横須賀製鉄所創設150周年記念展「すべては製鉄所から始まった—Made in Japanの原点—」などを手がける。

■有隣堂の出版物

<https://www.yurindo.co.jp/publication/book/>